

月山から肘折温泉へスキー縦走

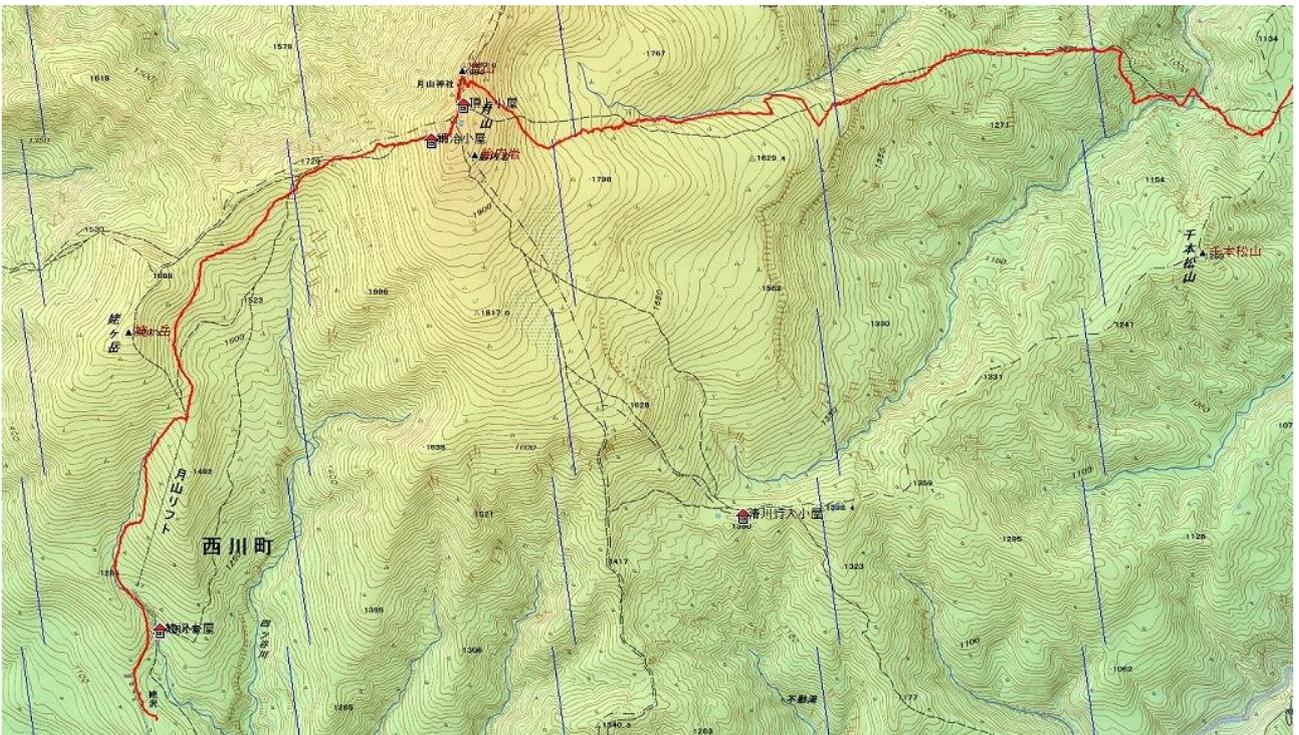
【日程】2015年5月6日

【エリア】月山

【形態】山スキー

【メンバー】Y、O

【報告】O



《ルート／タイム》

5月6日

姥沢駐車場 (4:45) ～月山リフト頂上 (6:00～6:10) ～月山頂上 (8:00～8:30) ～
千本桜 (9:10) ～清川橋 (10:15～10:45) ～念仏ヶ原避難小屋 (12:00～12:10)
～小岳を巻く (14:00) ～ 赤沢川 (14:55) ～ 猫又沢 (17:30) ～大森山トラバース終了地点
(ルーフアイミス 20:00～21:00) ～ 登山道入り口 (21:00) ～ 車デポ地 (22:00)

《報告》

3年前に月山・鳥海山を目指して東北ツアーを実施した。ところが、このときはゴールデンウィークという比較的安定した天候の時期にも関わらず大荒れの天気となった。月山はガスに覆われ、松尾芭蕉の碑まで登頂したものの、視界はすぐれず。また鳥海山に至っては祓川ヒュッテの登山口すらも辿りつけないという散々たるものであった。

今回はそのリベンジである。閉ざされた道に再び光を繋ぐことができるのか。奈良からの道中は長く、けれども記憶と記憶に残る山行となった。

3年後の月山は、まぎれもない快晴の一日となった。天候以外に前回と異なるのは、出発地の姥沢では宿泊した小屋が無くなっていたことだ。昭和 51 年に三代目の小屋として活躍していたが、暴風と大雪によって大破したというニュースを2年前に知って愕然とした。

リフト営業前の5時前からシールでの約1時間のハイクアップ。リフトトップの小屋では鍵がかかっておらず、自動販売機も運転していた。ここで一服する。

ゲレンデ整備のスノーモービルがリフトトップに姿を現した頃、月山の頂きを目指してさらにシール登行は続いた。前回と異なり、東北の山々が遠方に広がり、牛首尾根の南面にも釜状のすばらしい非圧雪の斜面が広がって見える。



(左)姥沢小屋の跡。土台のみが残る



(右)牛首の南面に広がる広大な斜面

頂上直下は前回同様、雪は無くなっている。約100m程度の板を担いでのハイクアップ。頂上の月山神社に到着する頃には、眼前に鳥海山が中空に浮かび上がるようにその姿を見せてくれた。

この報告を書く前に、回想を込めて森 敦「月山・鳥海山」を読んでいた。氏は実際には九州の出身であり、かつ両山には登ったところがないようだが、月山のふもとにある注連寺での滞在をもとに東北の長く深い冬の風景を見事に描写している。

その中で「月山は死の象徴であるのに対して、鳥海山は生の象徴であり、それらを結ぶ線上にこそほんとうの道があって、あやまたず生を見まもればおのずと死に至ることができる」と東北に息づく人々の死生観を描写する場面がある。



(左) 月山神社と彼方に浮き上がる鳥海山

(右) 頂上から念仏ヶ原に向かったの広大な斜面

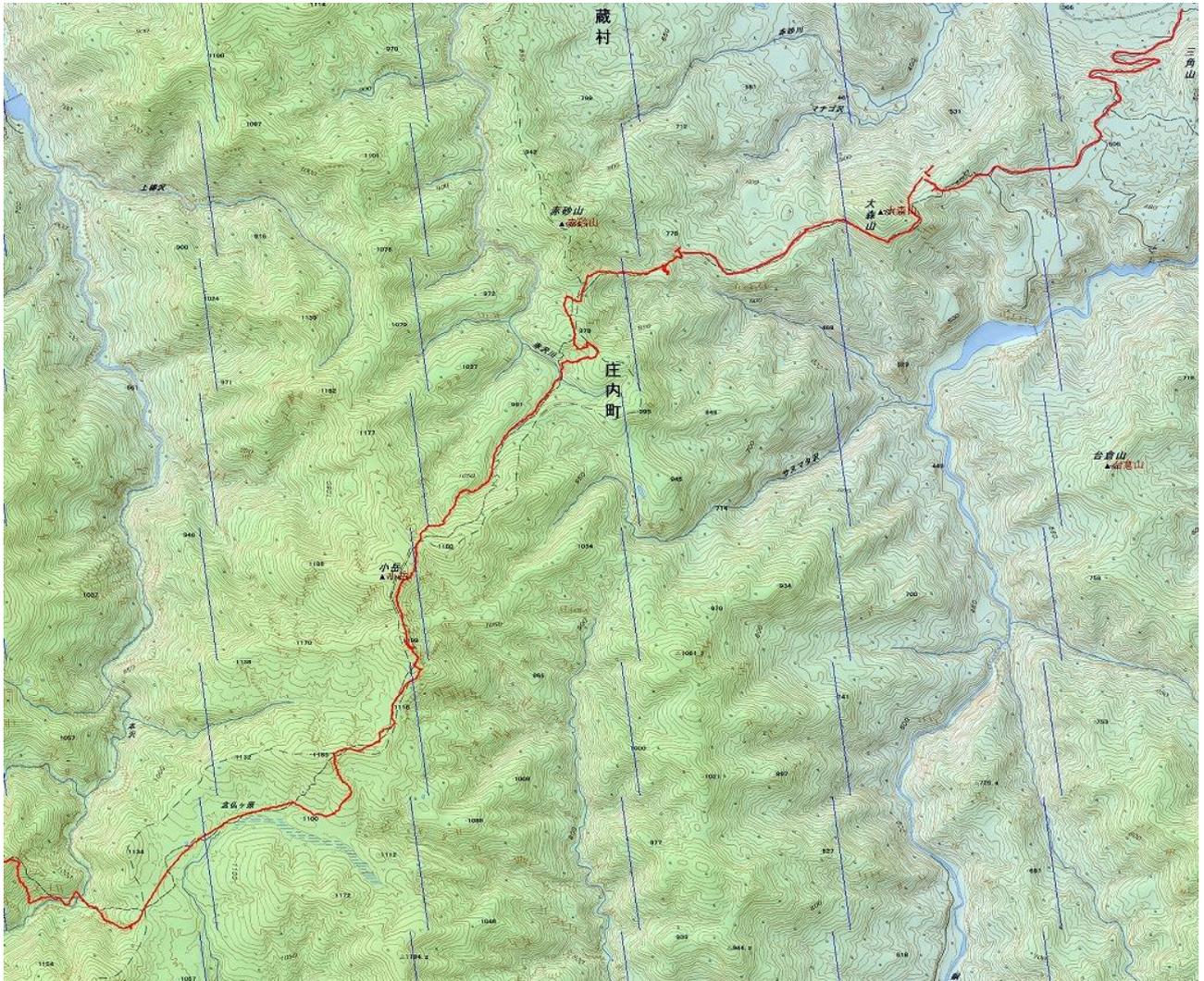
頂上でしばしの休息を経た後、念仏ヶ原を正面に見ながら快適な斜面に向かってドロップイン。千本桜という急斜面までは巨大なゲレンデを滑走する気分だ。

今年は積雪量が例年より少ないのか、藪の露出部分が所どころにある。千本桜ではスキー板を担いで降りる。そのあと、清川橋までは斜滑降で腐りかけた雪面を下ることとなった。

10時30分過ぎ、前半の最低標高ポイント、清川橋に到着。過去の記録などを読み返すと、橋自体は崩落しており、スノーブリッジが張り出している冬季以外は、沢の渡渉が必要なようだ。雪解けの沢が大きくその姿を見せ始めていたが、なんとか自然の架橋を渡り終え、大休止。

ここで、Yさんが驚きの声を上げる。スキー板の裏に粒子の集まりか、粘質の塊が板全体にへばり付いているというのだ。実際に指でこすってみると、ガムでもくっ付いたかのように、簡単に剥がれない。先ほどから滑走スピードが出ないと思ったらこういうことだったか…と驚きながら、善後策をとる。ナイフで板に傷つけることを覚悟しながら、粘質を除去。

どうやら、この物質、下山後に調べてみるとブナの実の油の可能性があるようだ。ブナの新緑と残雪の風景は東北の山塊ならではの、この日は予想しない曲者に悩まされた。



清川橋を渡ってからは、念仏ヶ原まで沢を遡上するようにシールでハイクアップしていく。念仏ヶ原の一端に到着すると、そこは大平原の入口だ。青空とブナと残雪が迎えてくれる。奥羽山脈のど真ん中であって、このような平原歩きを味わえるのはこのエリアならではの。念仏ヶ原から見上げる月山を見つめながら、別名を臥牛山と呼ばれることを思い出した。字のごとく牛が伸びやかに横たわっているような印象を与えるのだろう。

念仏ヶ原避難小屋は残雪で2階部分しか姿を現していなかった。ここで休憩を取った後は、積雪量にもよるが滑走に適する斜面はあまりないと言って良いだろう。

露出した藪の様子を見ながら小岳に向けてのハイクアップが続く。



(左) 念仏ヶ原。滑ってきた月山斜面をみる。



(右) 念仏ヶ原避難小屋

小岳の直下からは滑降に入るが、さきほどのブナの実の油の影響や、斜度がそれほどないため滑降で時間を稼ぐことができない。

ところどころの夏道をたよりに三又となった赤沢川の底部へ降りたつ。まだ沢は雪面に埋もれたままだ。

再びブナの実の油をナイフで削ぎ落とし、大森山に向けてハイクアップがつづく。もう3度目のシールを貼っての登行はスキー板に接着が効かない。仕方なく、担いでの重労働が続く。

猫又沢への下り部分で夏道を見失いがちになりながら、ルートファインディングが続いた。大森山西鞍部を迎える手前でとうとうヘッドランプが必要になる。

当然に歩行スピードも落ちる。疲労との戦いの中、大森山の南面のいやらしいトラバースを通過。夏道に残雪が張り出し、思うように進まないのだ。トラバース終了地点の尾根に乗った部分で、登山口に向けての尾根を誤って超えてしまう。このあと軌道修正するのに1時間程度かかる。

ツェルトを持参していたため、一時はビバークも考えたが、Yさんの最後まで諦めない努力と力強い体力に引っ張られながら、なんとか登山口らしき場所へたどり着くことできたのは21時。

まるで耐久レースのようなかつてない山行の中で、ひたすら板を担ぎながら、ヘアピンカーブを下りながら肘折温泉にデポしてあったレンタカーのリアランプが浮き上がったときは、憔悴と共に山から辛くも脱出したという感すら私は覚えた。嗚呼疲れた！

個人的な感想としては、限られた遠征の中でのワンデイとなりましたが、2日間に分けてのツアーの方が日程的に理想的でしょう。また残雪の時期を考えると4月下旬くらいが藪の張り出しも少なく、斜面滑走の範囲も増えるのではないかと思います。

しかしながら、月山を単にリフトで駆け上がり頂上から滑って往復するような山行と異なり、たとえば大峰・台高山脈なら大台ヶ原を東や西大台の周遊ではなく堂倉谷や東の川から遡行するのと同じように、山の懐に飛び込んでその山の偉大さを知るといふ山行として挙げるならば、間違いなく月山から肘折温泉へのルートは指折りとなるでしょう。なかなか東北の深山まで遠征してこのようなロングルートは味わえません。企画を頂いたY氏に感謝しつつ、無事に山行を終えることが出来たことにただ感謝をしたい。

※このルートは車での回収が必要です。月山リフト駐車場と肘折温泉に2台の車を置き、行動日以外に車での周回日がさらに1日要るでしょう。